

コレヒドール島玉砕記

福岡県 野 中 義 治

海軍第三二八設営隊海軍上等工作兵、昭和十九年八月一日応召、年齢三十二歳。

中国北京華北電信電話股份有限公司本社から東京支店へ転勤一年目である。電話交換手要員として募集した新入女子社員を引率して北京本社への渡航手続きのため鹿児島県庁へ出張中、召集の通知を受けた。

下関宿舎を出る時空襲警報、早朝の出発を午後にはばし、郷里佐賀から佐世保相浦海兵団へ入隊、一か月の新兵教育の後、針尾海兵団・枇杷坂部隊へ配属になる。

海軍設営隊は飛行場建設を目的とした新鋭機械化部隊で、ブルドーザー、耕運機、ローラ車、散布車、発電機車、ダンプ車、通信車等土木設営の車両十数種。これらの実地訓練をし、さらに呉軍港広場に移り一か月おくれの応召隊員と合流、総員四百五十人の三二八設営隊は休

むまもない毎日の特訓を受けて、十一月末呉軍港より出帆。戦線は比島にうつり、レイテ島攻防の激戦中であつた。

復員は二十一年十一月。

戦死公報で葬式のすんだ直後であつた。自分の遺骨箱を自分自身で県庁復員課へ返還した。

それからすでに四十年ちかい歳月がたつ。七十歳で現住所・福岡県築上郡椎田町真如寺蔭平に隠居している。

この体験記録はおぼえ書から記憶をたどりつつ書き綴つたものである。

バシー海峡輸送船団の壊滅、ハセナ戦線の撤退、コレヒドール島玉砕、モンテルンバ捕虜収容所、ニューピリビット監獄、戦犯絞首刑の顛末、戦事捕虜の労務等、瞬時も死からはなれられないまま苦闘のかぎりをつくして生きのこつた一兵卒の戦争とはどんなものであるか、ありのままのそしてその痛恨の真相を一人でも多くの遺族の方々につたえておくのが願いです。

戦死公報

『故海軍上等工作兵野中義治君戦死（玉砕）状況』

記

第三百二十八設営隊ハ昭和二十年一月七日「マニラ」ヨリ「コレヒドール」島水際防禦工事施設ノ為、設営隊長以下二百七十一名転進ス。

通信杜絶ハ二月二十三日ナリ。総員勇戦奮斗敵陣ニ突撃玉碎セルモノト認ム

(終)

現地報告ニ基キ之ヲ記ス

昭和二十一年十月八日

元相浦海兵団副官 松尾政雄

—コレヒドール島玉碎記—

コレヒドール島玉碎の詳細な戦況は、戦後いまだ報道されていない。

軍とは名だけ、まったくの無装備・無戦力のまま、いわゆる負けいくさの冷酷さとひあいのなかで玉碎した防衛軍将兵は五千人をこえる。

その全員が歓呼の声にゆうやく父祖の地をはなれ、じゅん国の意気もたからかに幾度かの戦いに死線をのりこえてきたつわものばかりであった。その歴戦の勇士た

ちが唇をかみ切るほどの無念さと、身をふるわせてもやり場のない焦慮のうちに、むなしく散華して行ったのである。

日本軍名「桜隧道」のマリントンネルの中で一瞬に戦没した三千数百人の将兵の中に「万歳」の声は一つもない。

断末魔の口から出る声は母の名であり子供の呼び名であった。

その戦況があまりにも凄惨であったがために、生存者の誰もが口に出しては言えなかったのではないかと思われる。

玉碎当時のコレヒドール島防衛軍は、艦船を失った将兵で編成された海軍地上部隊が主力で、ほかに丸四艇隊、陸軍一個小隊、総数約五千人である。

海軍第三百二十八設営隊は米軍のリンガエン湾上陸によって部隊を二分し、副隊長のひきいる一隊はルソン島中部山岳地帯のバギオに向かい、隊長以下二百七十一人はマニラ周辺の陣地設営を終えて一月七日コレヒドール島に転戦し、水際防禦施設の工事にあたっていた。

一月二十日ごろ米空軍の攻撃が始まった。午前中は双胴のロッキード戦闘機の偵察と機銃そうしゃ、午後にはB29の編隊重爆撃。ごじつ兵士達が定期便と呼んでいたほど毎日々々定刻にらしいしゅうして来た。

南港の棧橋と付近の建造物は完全に消滅し、北港の波止場も物資のようりに困難するほどの打撃を受ける。

それでも島にはどこにでも地下砲台があつてそのなかに居住している兵員の空襲による犠牲者はごく少ない。

しかし連日の猛爆で道路はすんだんされ島全体が緑ひとつないまるはだかの状態となつてしまつた。見たすかぎり地はだろていしている。やがて海上に敵艦船がゆうよくし始めた。この敵艦に対してはその停泊地と推察されるオロンガッポ軍港に丸四艇隊（水上特攻隊）の夜間攻撃が何回もくりかえされるのだが、敵艦は周囲にいかだを浮べて攻撃をふせぐので艇は近寄れない。丸四艇の特攻も功をそうせず、敵はいつ上陸して来るかもわからない。

各隊はもちば々々でぼうぎよ陣地をかためるため作業は夜間にぞっこうされた。

しかし米軍は海上からではなく空から来た。二月二十三日米落下傘部隊の降下である。早朝からの戦闘機による機銃掃射をくりかえしたのち、澄みきつた青空に赤・青・黄・白と一時に大輪の花が咲いたようにまいおりて来る。みとれるほどの光景であつた。これをげいげきするわが軍の防衛部隊には、機関銃ひとつない。四四式騎兵銃だけである。二、三丁の歩兵銃でそげきをこころみたけれども敵兵一人もたおせない。

マリントンネルの弾薬庫に砲弾は山とつまれているがこれを発射する砲がないのである。各地の戦場に持つて行つてしまつてゐる。そうとうする大砲の威力はななく、まったくの無抵抗のまま無念の眼で敵兵の降下をみつめてゐるばかりであつた。

たちまち島の中央部は占領されて日本軍は東部と西部に二分されてしまつた。オタマジャクシ形の頭部にあたる島の西部は、そのちよく艦砲射撃でかいめつしてしまひ、海に向かつて並んでいる砲台は米軍のこうちくしたものである。そのしよざいはてのひらを指すようなものであつたらう。艦砲のぜっこうのひょうてきとなり生

存者は一人もないもうげきであった。

東部はマリントネルの地下要塞日本軍名「桜隧道」に集結、その数三千五百人である。しかしトンネル上部山地は米軍に占領されて手も足も出ない。袋の中のネズミである。飲料水がなくなった。

トンネル南東海岸に三年前マッカーサー元帥が脱出の時使った飛行場があつて、そこにわき水を集める井戸がある。各隊からやいんにまぎれて水のうに水をつめて運びあげる作業が始まった。しかし三日目には米軍に発見されて水くみ部隊は次々に全滅した。

マリントネルに並行してその南にもう一つ海軍が丸四艇基地にするためにあたらしくさくした海軍すいどうがある。そのすいどう内部にたいりょうの火薬をじゅうてんして山もろとも山頂の敵を爆破していつせいに反撃する作戦がたてられた。弾薬庫の爆薬は南口の連絡路を通つてつぎつぎ海軍すいどうに運搬され、ざいらいの火薬のうえにさらにうわづみされた。導火線のふせつも終つて連絡路もかたくへいさされた。

二月二十五日の夜は、三千五百の将兵の息づまるよ

うな期待のうちにその爆薬に点火された。足もとからつたわってくる地震のようなぶきみな振動は、全山をゆるがしていったが、かたい岩石の山は爆破されず、爆薬のふんえんはふうさされたはずの南口通路からトンネル内にぎやくふんにゅうされて来た。

突撃たいせいでたいきしていた将兵はなにごとがおこったかわからないまま、そのはげしいふんえんの熱気とガスにつぎつぎなぎ倒されて行つた。長さ三百メートル弾薬運搬用複線電車レールのある幅八メートルのトンネル内はししるい、足のふみばもないありさまであつた。一瞬にして三千人の戦死者である。わずかの難をのがれたのは北口通路に待機していた部隊と警戒のため各出口に詰めていた歩哨隊だけである。ふんえんのおさまるのを待つて生き残りの兵は、散乱しているしをトンネルの西側に積み重ねて通路をつくり、敵の侵入に対し応戦準備にとりかからねばならなかつた。だがその日は敵も驚いたのであろうか、攻撃してこなかつた。

そしてその夜、飛行場につながるテンパー砲台を通つてさらに東端にある地下すいどうにてつたいするため、銃

と飲料水をいれる水のうを持って飛行場の井戸へ向い行動をおこした。敵はこれを察知して照明弾を打ちあげ東出口うえから機銃掃射をするほか、迫撃砲を間断なくうち込んでくる。しかし時間差で飛び出し、また偽装かがしを投げだす等の奇策を繰り返して敵の銃撃をかわし、全員脱出には成功したが、テンバー砲台付近で海上からの艦砲の直撃、まさに文字通り雨あられの弾丸の洗礼をあびた。

最東端部の地下すいどう・丁トンネルは日本軍の病院になっていた。地をはうようにしてたどりついた兵隊は二百人前後、無傷の者はほとんどいない。小銃は五十に足らず弾薬はかいむで、これでは戦闘は不可能である。

ここでついに脱出命令が伝えられた。動けない者はトンネルを爆破して自決する。その他は各自の工夫で離島する。階段をあがってトンネルを出た。出口に緑のない木が一本血潮のような真っ赤な花をつけているのが何か印象的だった。

海岸におりる。そこかしこ三、四人単位の共同で筏がつくられていた。材料は海辺にいくらでもうちあげられ

ている。それを鉄線でつなぎ合わせる。米軍の襲撃はこまではまだ延びていないが、迫撃砲弾と銃弾は海上まではげしく飛んでくる。危険を感じた時は、海岸沿いに無数にある機関銃座を持った洞窟に身をかくして筏づくりに専念した。銃剣でオールもつくりいよいよ脱出である。

海峡をへだてて北にバタン半島、南にバタンガス半島の山々が夜目にもはっきりとみえる。そのどちらを目標すか、どちらにしても運を天にまかせて敵艦艇のなかをくぐりぬけるのである。

こうして二月二十八日夜、打上げ花火のように照明弾と曳光弾の飛びかうなか、敵の一方的な攻撃の前に反撃するすべもなく、コレヒドール島防衛軍は完全についてい

った。
戦後、収容所をたずねまわって確かめえた生存者は僅かに九人である。